倭寇と宮古について考える
～『琉球諸島における倭寇史跡の研究』に学ぶ～

下地　和宏（宮古島市総合博物館協議会）

はじめに

本稿は稲村賢敷氏の名著『琉球諸島における倭寇史跡の研究』に学び、倭寇と宮古の関係について考察する。稲村氏は著書の中で倭寇および日本人渡来者の用語を使用しているが、両者を使い分けているのかいまいちすっきりしない。稲村氏は「上比屋山は倭寇の根拠地」であること、またこの遺跡から拾得される陶磁器は倭寇がもたらしたものであることを強調されている。

稲村氏は、1957 年３月に『宮古島庶民史』(以下『庶民史』と略す)、同年９月には『琉球諸島における倭寇史跡の研究』(以下『倭寇史跡の研究』と略す）を立て続けに発刊した。『倭寇史跡の研究』は第３編第 21 章で構成されている貴重な研究書で、「双紙は倭寇と密接な関係がある」ことを論述している。稲村氏の倭寇史跡の調査は宮古にとどまらず八重山諸島、久米島にまで及んでいる。しかし、『庶民史』に比べればほとんど利用されていない感がする。

和歌森太郎氏は『倭寇史跡の研究』に序を寄せて「琉球の中世史における日本との交渉を究明したものとして、また日本人の中世における活動の一端をこく明に跡づけたものとして、また陰陽道の普及過程を教えるものとして、高く評価さるべき力作であり、琉球の方々にはもとより、わが学界ににとっても一読に値するりっぱな業績である[1]」と賞賛している。

また、柳田國男氏は「まだ少し気づかわしい所もあるが、大体において宮古島には日本人が沖縄を通らずに直接、しかも大分多く入って来ている。そして一時倭寇の盛んな時分にはあそこが一つの根拠地であったことを書いたもので、もっと注意されていい本だと思う」とした上で、「沖縄の歴史研究家の中には、青磁の欠片が出たというだけで倭寇の遺跡だというのはおかしいという人もあるらしいが、そこで出て来る分量が問題になってくる。それが相当沢山出て来れば、ただ偶然といって片づけられなくなるだろう。要するに、歴史を、記録にあるからというだけできめることになると、結局想像説に堕してしまうのである[2]」と喚起している。

柳田氏がいう「相当沢山」とは、どのような状態を指しているのか漠然としているが、稲村氏が倭寇史跡とする上比屋山遺跡からは「相当沢山」の青磁片が出て来るということなのであろう。

ところで、宮古における倭寇の関係にはじめて言及したのは伊波普猷氏であろう。明治 38 年（1905）９月に発表した「琉球に於ける倭寇の史料[3]」である。伊波普猷はこの論文の中で、倭寇の襲撃に備えたヤラザモリ城について論述し、倭寇の口碑を紹介した上で宮古について次のように述べている。

「宮古島の歴史を見ると按司の時代とか殿の時代とかいうのがあるが、殿の時代は恐らく倭寇の連中が一時宮古島を占領していた時代であろう。殿の名に日本流の名のあるのを見てもわかる」。また〔附記〕として、「慶良間島や伊平屋島に倭寇の口碑があり、宮古島旧史亦之をほのめかしているのを見ると、倭寇は防備のない島々を一時若しくは永久的に占領しその根拠地としたのではないかと疑われる」とも述べている。

倭寇が「宮古島を占領していた」という伊波

氏の見解には、驚きを隠し得ない。占領の時期は「殿の時代」だとしている。殿の時代とは何時ごろなのか。『宮古史伝』(以下『史伝』と略す)は按司・殿の時代はほとんど同時代だと見なし、「1320 年代から 1380 年代のおよそ 60 年間[4]」を想定している。概ね 14 世紀を視野に入れている。

1963 年７月１日、「琉球新報」は特集「琉球列島」の中で上平屋森「倭寇森の騒動／津波がのんだ幻の城」と題して上平屋城を取り上げた。その中で下地馨氏は「自由貿易港説」を展開した[5]。これに対して稲村氏は、「ウイピャー森は倭寇の根拠地ー下地氏の"自由貿易港説"に答えるー」と題して全５回にわたり反論した[6]。これに対して下地氏は、「宮古の上平屋森は海外発展の遺跡ー青磁・南蛮がめは倭寇の略奪物でないー」と題して全 11 回にわたり反論した[7]。また、稲村氏は、「遺跡"上平屋森"をめぐる論争ー倭寇説の立場から下地氏に答えるー」と題して全６回にわたり再反論した[8]。いわゆる「倭寇史跡論争」といわれる。この紙上論争は『倭寇史跡の研究』の発刊から６年後のことである。それ以降の進展は見られない。惜しむらくはお二人とも他界された。

稲村氏は、倭寇は「自らの行動に就いて之を記録に残すことを知らなかったいうよりも寧ろ之を避け、又は秘したと思われる。亡命者や海寇に関する事であるから、文献は見つけようとする事は恐らく無理である」と指摘した上で、残された方法は「史跡や発掘品に対する調査であり、又伝説、習俗、行事〔祭事〕等に対する考察による他はない」更に「唯一の彼等によって残されたと思われる双紙と称する卜占書が残っている事[9]」は重要な史料である事に視点を据えて倭寇史跡上平屋森（城）に向き合っている。

『倭寇史跡の研究』の根幹は、上比屋山遺跡は倭寇の根拠地であること、また、倭寇あるいは日本人居住者が宮古にもたらした「双紙」と安倍晴明著「金烏玉兎集」が同じものであることを論証したことにある。

本稿は『倭寇史跡の研究』に学びながら、稲村氏が強調する倭寇の根拠地上比屋山遺跡と倭寇との関連について考えることにある。また、倭寇については、倭寇研究者の研究を借用させてもらうことになる。それから「上比屋山倭人居住地の出来たのと同時に当地に伝来[10]」した「双紙」については、その伝来の年代について触れることに止め、稿を改めることにする。

一　１４世紀の東アジア

14 世紀後半の東アジア（図１）は、変革の時期を迎え、政治的にも不安定な時期であった。倭寇の活動が本格化した時期と重なる。中国、朝鮮および日本の政治的な安定は倭寇の活動を必然的に低下させた。一方、南朝方の征西府滅亡によって、配下の人々は琉球諸島に亡命した者もいたという。以下、東アジアの動静を概観する。

高麗王朝の末期は、1350 年以来度重なる倭寇の侵攻に悩まされていた。この年の干支が庚寅（かのえとら）であったことから朝鮮側では「庚寅（こういん）以来の倭賊」ともいう。朝鮮には「三島（さんとう）の倭寇」あるいは「三島の賊」という言葉がある。三島とは対馬・壱岐・肥前松浦等の地方で、農業の生産性はきわめて低く、交易と漁業が重要な生活の手段であった。「三島の飢民はつねに倭寇に転化する要因を内包していた[11]」という。

1380 年、高麗国の将軍李成桂（りせいけい）は、倭寇の首領阿只拔都（あきばつ）（15、16 歳）と戦い、倭寇の大軍を撃破した。この戦いで、川の流れは戦死者の血で６、７日間も赤く、高麗軍は 1,600 頭余の馬を捕獲したという[12]。この成果を背景に李成桂は政治・軍事の諸権力を手中に治め、1392 年高麗王

朝を倒して李氏朝鮮を建国した。首都を開城から漢陽（ソウル）に移し、朝鮮国の太祖となった。

中国では、蒙古民族によって建国された元は、皇帝の相続争いに加え、重税と紙幣の濫発で人民は生活窮乏に陥っていた。各地に農民の大規模な蜂起が起きた。貧農の子に生まれた朱元璋（しゅげんしょう）は江南を統一し、北京に攻め入った。1368 年、朱元璋は元を滅ぼし帝位に就いた。これが明の太祖で、漢民族による明の建国である。太祖は倭寇対策として人民が海外に出ることを禁じた海禁政策をとった。1371 年を初めとして数度に亘り「海禁令[13]」を発令しているが、密貿易は後を絶たず、その成果は芳しくなかったようである。

日本では鎌倉幕府の滅亡後、後醍醐天皇は 1334 年、元号を建武と改め、世にいう「建武の新政」を始めた。皇族と武士の間には相容れぬ問題をひきずり、1335 年足利尊氏らは反旗した。尊氏は九州に逃れたが、少弐、大友、島津らの援助を受け、1337 年京都を占領し別に天皇を擁立して「北朝」と称した。後醍醐天皇は吉野に逃れ、ここを「南朝」とした。半世紀余におよぶ南北朝内乱の始まりである。後醍醐天皇はその２年後、1339 年吉野の山中で病死した。1392 年、北朝と南朝の両王朝は統合、内乱は終息した。以後北朝側の天皇が朝廷を継続することになった。

琉球では、中山、南山、北山の三山が鼎立していた。中山は浦添城、南山は大里城、北山は今帰仁城を拠点とした。中山では察度（さっと）が 1350 年王統を築き２代 56 年続いた。中山王察度は 1372 年、明国の招諭に応じて弟泰期を明国に派遣、初めて進貢し、冊封・進貢関係を結んだ。1380 年には山南王承察度（しょうさっと）、その３年後に山北王柏尼芝（はにじ）も中山に続いて明国に進貢した。察度王は 1395 年に没し、世子武寧が跡を継いだ。察度王の時代はいわば「倭寇の時代」、明国の「海禁令」の時代とも重なっていた。

ついでながら、山南の按司であった尚巴志は 1406 年中山を滅ぼし、父思紹を中山王とした（第一尚氏の始まり）。尚巴志は 1416 年に山北王攀安知（はんあんち）、1429 年に山南王他魯毎（たるみー）を滅ぼし、三山を統一した。

宮古では「婆羅公管下密牙古人[14]」として初めて元国の記録に登場する。1317 年のことである。その頃は中国華南の人々や倭人が、宮古に出入りしていた時代的背景がある。宮古に伝えられる倭人や唐人の渡来伝説[15]の多くはこの 14 世紀の時代を背景にしていると考えられる。

「密牙古人」から 70 余年後の 1390 年、与那覇勢頭豊見親という人が、八重山の首長を伴い察度王の中山に「入貢」した[16]。南北朝が統合する２年前のことである。その２年後には高麗国が滅び、李氏朝鮮が建国された。東アジアが政治的に不安的な時代を抜けだした頃に当たる。いわゆる倭寇の活動が下火になった時代である。後述する征西府配下の人々が南下する時代とも重なっている。

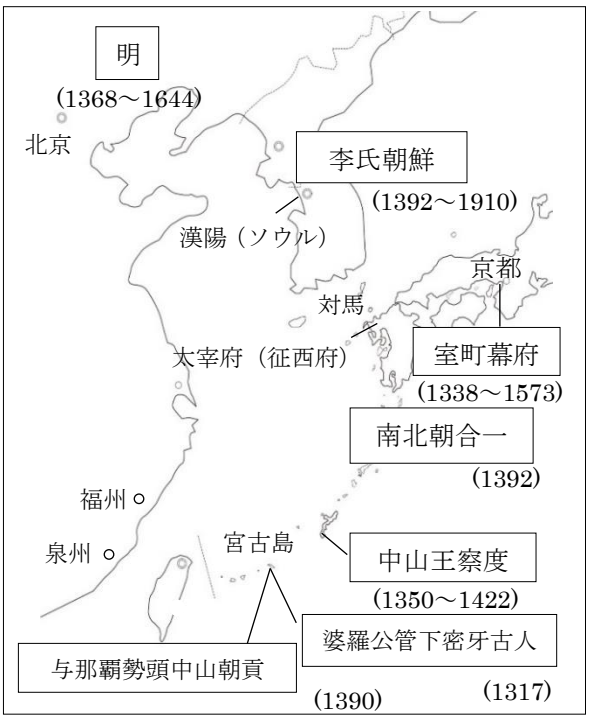

図１　14 世紀の東アジア

二　前期倭寇

倭寇の始まりについては、『高麗史』の忠定王２（1350）年２月の記事が夙に引用される。「倭、固城・竹林・巨済に寇す。合浦の千戸〔管軍官〕の崔禪と、都領〔軍卒指揮官〕の梁琯等、戦いて之を破り、三百余級〔人〕を斬獲す。倭寇の侵すは、此れより始まる[17]」の記事である。倭寇の文字は、『高麗史』の高宗 10 年（1223）５月の記事「倭寇金州」が初出とされるが、「倭、金州に寇す[18]」と読むべきだとする。

田中健夫氏は、「高麗で『倭寇』という固定した観念ができあがり、倭寇の文字が熟字として用いられるようになったのは 1350 年以後とすべきである[19]」としている。つまり高麗の人々に倭寇が意識化されたのは 1350 年以後とする考えである。

『倭寇史跡の研究』は、倭寇が活動していた時期を前期倭寇、日明貿易と倭寇、後期倭寇に分けて捉えている。前期倭寇は 1350 年から 1392 年の 42 年間、日明貿易と倭寇は 1393 年から 1521 年の 28 年間、後期倭寇は 1522 年から 1591 年の 69 年間としている[20]。

田中氏は、前期および後期２つの時期の倭寇は、同性格あるいは同内容のものではなく、連続性をみとめることは難しいとして、「14～15 世紀の倭寇」「16 世紀の倭寇」というよび方をとることにしている[21]。

田中氏の提起を無視するわけではないが、本稿ではあえて『倭寇史跡の研究』の前期倭寇、後期倭寇の用語を用いる。倭寇との関連で宮古を捉える場合、後期倭寇はほとんど関係ないと見なし得るので、本稿では前期倭寇を中心に考えることにする。

稲村氏がいう前期倭寇は、後醍醐天皇の皇子懐良親王（「かねなが」とも読む）が肥後国菊池城に征西府を設置（1348 年）してから南北朝統合（1392 年）に至るまでの期間に当る。侵寇の対象は主として朝鮮の西南沿海地方で、毎年数回以上十数回の多きに及んでいる。中国沿岸にはこの期間９回しかない[22]、と稲村氏は分析している。後述するように倭寇は 1419 年の「応永の外寇」で壊滅的な打撃を被り終息したといわれる。

田中氏は「倭寇は食糧の強奪、および沿海人民の掠奪を目的に行動していた。」と述べている。

一つ目の食糧の強奪は、租米を運搬する漕船および租米を備蓄する倉庫が攻撃の対象となった。倭寇集団は軍隊的に編成されていたわけではないから、数人から万余におよぶもの、数艘から数百艘におよぶものまで雑多であった。しかし、「最盛時〔1370 年後半から 1380 年前半〕の倭寇は、300～500 艘の船団、千数百の騎馬隊、数千の歩卒を擁した大集団で行動していた。それに婦女も含まれていた[23]。」

二つ目の掠奪された高麗・朝鮮の沿海人民は、日本国内で「奴婢」として奴隷的に使用されることもあったが、多くは送還・転売など一種の交易の対象とされていた[24]。

三　朝鮮被虜人の送還

倭寇の行動目標の１つに、朝鮮沿岸人民の掠奪と奴隷化、送還あるいは転売という営利活動があった。彼らは朝鮮被虜人と呼ばれる。田中健夫氏は「那覇は国際港の観を呈していたらしく、日本からの船もここに多く立ちより、倭寇に捕らえられた高麗の被虜人も転売されたにちがいない。那覇が倭寇の活動圏の一部であったことは容易に理解されよう[25]」と述べている。

琉球に転売されたと見られる朝鮮被虜人は、1389 年から 1409 年の 20 年間で琉球国から数十名が朝鮮に送還されている。以下、朝鮮被虜

人の送還について見ることにする。

田中氏は、「朝鮮半島の人民を掠奪したのは、労働奴隷を確保するとともに被虜人の送還が割りのよい交易だったことに因る。倭寇は被虜人を自身で送還するほかに、被虜人を他の送還者に提供することによって利益を得、送還者はその行為の代償として朝鮮の木綿等の物資を得たのであり、被虜人の送還は一種の奴隷貿易であったということができる。[26]」と述べている。

例えば、九州探題の今川了俊は 1379 年 320 人を送還している。1388 年には 250 人を送還し大蔵経を求めている。「朝鮮王朝時代になると被虜人送還は急激に増加した[27]」という。

琉球に転売された朝鮮被虜人は、中山王察度および世子承察度の名で送還された。被虜人の人数が以下の通り知られている[28]。

1389 年：送還人数不明。琉球は硫黄・蘇木・胡椒および甲（かぶと）を献上した。
1390 年：男女 12 人。
1392 年：男女 8 人。
1394 年：男女 12 人。
1397 年：被虜人および漂流人 9 人。

10 年間中断のあと、1409 年中山王尚思紹は、朝鮮に胡椒・象牙・白礬（焼明（みょうばん）礬）・蘇木を贈り、婦女 3 人を送還している[29]。その後、送還は行われなくなったようである。

朝鮮王 3 代太宗は 1416 年、「本国の人（朝鮮人）倭のために虜せられ、琉球国に転売された者甚だ衆し」と聞き、前護軍（将軍）李芸を琉球に派遣して 44 人を連れ帰っている[30]。

1427 年、中山王尚巴志は米を朝鮮に乞うために被虜人 50 余人を送還しようとしたが、逆風に遭って出発出来ないままでいた。そこに偶々〔琉球〕国が乱れたことと重なり送還することが出来ない状況にあった[31]。1429 年には、琉球国からもどった倭人が「貴国（朝鮮）の被虜人は、飢饉により帰国を切に希んでいた[32]」ことを博多にいた朝鮮の外交使節に伝えている。

田中氏は「15 世紀初頭における尚巴志王統成立後、琉球は暹羅（シャム）・三仏斉（シュリービジャ）・爪哇（ジャワ）・満剌加（マラッカ）・蘇門答剌（スマトラ）・巡達（スンダ）・仏太泥（パタニ）・安南（ベトナム）等の各地と多彩な交易活動を展開した（『歴代宝案』）。これら諸地域の物資は直接間接に倭寇の手に渡ったに違いなく、倭寇は琉球と接触することによってその影響範囲を拡大することになった[33]」と述べている。

琉球が南方諸地域と交易活動を展開した状況は、14 世紀末に宮古・八重山が中山に入貢した後のことになろう。このことは倭寇行動の展開と関連しているのであろう。

朝鮮被虜人について、砂川明芳氏は宮古に視点を据えた考察を展開している[34]。史料が乏しいだけに砂川氏の想像の域を出ないかも知れないが、示唆に富んだ考察と見られるので、長くなるが参考のために紹介する。ちなみに、砂川氏は「被掠朝鮮民」の用語を用いている。考察の概略は以下の通りである。

ンバタキと朝鮮人。そこから倭寇被掠朝鮮民のことが発想される。倭寇が朝鮮沿岸の村々を襲い、人々を拉致し、それを琉球の離島で売ったもののようである。私には、与那覇勢頭の父親が朝鮮民であったように想えた。与那覇勢頭の中山進貢の時期と琉球中山からの被掠朝鮮民の送還とが微妙に符号しているからである。与那覇勢頭は 1390 年に八重山と共に、はじめての中山への進貢を行った。この宮古、八重山の中山との結びつきは、正史『球陽』に「是により中山始めて強し」と書かせるほど重要な出来事であったらしい。

与那覇勢頭たちの中山との結びつきのころ二つの変化が出てくる。それが、中山が強くなっ

たことを示しているはずだ、と私は思う。その一つは南方物貨（胡椒など）が中山から中国への進貢品にでてくることである。もう一つは、朝鮮への倭寇被掠朝鮮民の送還を名目とした朝鮮との通交が始まったことである。

朝鮮と琉球との交流は、1389 年中山察度王が使者を高麗国に派遣し、被掠朝鮮民を送還したことが始まりである。倭寇に掠められた朝鮮の民を送還することを名目とした。この使節の派遣交流は李朝の朝鮮に替わっても続いた。しかし、中断が 10 年ほどある。中断の理由は察度王統が滅び第一尚氏に移る時期に当たることで中山内の政治的不安定だと朝鮮に対しては述べているが、中断の 10 年間には、明国に対しては進貢使を派遣しているのだからそれはほんとうの理由ではないはずだ。これは朝鮮民の供給源に異変があったことを示唆しているのだ、と私は思う。その異変は宮古における争乱ではなかったろうか。争乱の時期は、多分 1400～1408 年ごろだろう。

砂川氏はンバタキを農奴としているが、あるいは奴婢（賤民）とも考えられる。与那覇勢頭豊見親の父はンバタキであったという伝説を基にして、倭寇によって転売された被掠朝鮮民だと想定している。すなわち与那覇勢頭は被掠朝鮮民の子であるということだ。被掠朝鮮民は宮古にも数多く転売されたので、宮古はその供給源になったという。宮古に起きた争乱で送還は 10 年間中断された。争乱とは後述する「与那覇はら軍（イウサ）」のことである。「白川氏家譜正統」（1754 年作成）に元祖与那覇勢頭豊見親は「生卒は不伝。あるいは天人之子という」「父母は不詳」とある。出自不明の与那覇勢頭が唐突に宮古に登場したようにも受け止められる。あるいは、「家譜」作成にあたって父母はンバタキであったという伝承をあえて伏せたのであろうか。

一方、『庶民史』は「〔与那覇勢頭〕豊見親は身長 6 尺余の偉丈夫であって、筆をくわえて生まれたとも伝えられ、文の人、平和主義の人であった[35]」という伝説を紹介している。身長は 6 尺余というから、当時としては群を抜いて大きかったということであろう。一般的な宮古人には見られぬ長身である。倭寇に朝鮮から拉致されたとする与那覇勢頭の父は 1390 年以前に宮古に転売されたことになろう。その頃は南北朝の争乱期、征西府が太宰府にあった頃に当たる。ンバタキの父は青年であったとも伝えられているようなので倭寇の最盛期に転売されたことになろうか。

四　征西府と倭寇

１、征西府と懐良親王

後醍醐天皇の皇子懐良（かねよし）親王は、征西将軍として九州の南朝方を統率するために、1342 年九州に下り、肥後菊池氏の菊池城を南朝方の征西府とした。肥前の松浦氏とも相提携して幕府軍を退け、19 年後の 1361 年、太宰府に征西府を樹立した。この頃が九州における南朝方の最盛期となった。懐良親王は明国から「日本国王良懐（よしかね）」の称号を与えられている。

幕府から九州探題に任命された今川貞世（了俊）は、大内氏、大友氏、少弐氏、一色氏、島津氏ら幕府方の勢力を固め、1374 年太宰府を奪回した。懐良親王は太宰府を追われ菊池城に退き、13 年におよぶ太宰府の征西府は幕を閉じた。それから 9 年後の 1383 年、征西府の大黒柱懐良親王は死去した。40 年余、九州で南朝方の後方支援に尽力した大黒柱が亡くなったことは、征西府にとっては大きな打撃となった。

征西府が太宰府にあった時期は、倭寇の活動が本格化した時期と重なる。先述したように朝鮮から「三島の賊」として倭寇の主要根拠地と

見られていたのは対馬・壱岐および松浦地方とされる。明および朝鮮側は倭寇の禁圧を日本の朝廷や幕府に要求しているが、効果は上がっていない。征西府側と倭寇の親近関係について、稲村賢敷氏は「幕府としては倭寇と征西府を同一体のものとして仇敵として臨みその殲滅を期したことは明らかである[36]」と述べている。

２、琉球に南下する倭寇

懐良親王の死去９年後の 1392 年、南北朝は合一、半世紀余におよぶ内乱は幕を閉じた。すなわち征西府の政治的役割も終わることになった。稲村氏は「征西府方の将士は従来の縁を頼って倭寇に投じ海外に亡命することになった」。それで「彼らは漸次南下して幕府の勢力の及ばない遠隔の琉球諸島に走り此処に彼等の根拠地を定めて、支那〔中国＝明〕及び南蛮地方に対し倭寇をなし又密貿易をなしたものである[37]」と述べている。

日本の内乱終結（1392 年）や朝鮮の建国（1392 年）および明の建国（1368 年）による政治的な安定は倭寇の活動に直結し、その行動範囲は必然的に狭められた。征西府の滅亡後、あるいは倭寇猖獗が下火になった頃、琉球に南下した倭寇もいたとされるので、時期的には 15 世紀初頭と見られる。先述したように田中氏は 15 世紀初頭「倭寇は琉球と接触することによってその影響範囲を拡大することになった」と述べている。

稲村氏は「倭寇も幕府の取締が厳重であったために国内に潜伏する事が困難となり、遠く琉球諸島に隠棲するようになり」「少人数で支那官憲の隙を窺って暴威を恣（ほしいまま）にするゲリラ戦に変わっていった[38]」とも述べている。いわゆる「征西府くずれの勢力」が倭寇の仲間となり南下してきたということであろう。

前述したように「倭寇の連中が一時宮古島を占領していた時代」、すなわち按司・殿の時代は 1320 年代から 1380 年代の頃が想定されている。この時代の末期は倭寇が最も猖獗した時期と重なる。

この想定年代からすれば、倭寇はその活動が猖獗のころ宮古に渡来し、宮古を占領したということになる。その場合、宮古のどの地域を拠点にして占領したのだろうか。また、倭寇は征西府が滅亡する以前に宮古を占領したということなのであろうか。稲村氏は城辺の上比屋山に限らず、平良にも倭寇は居住していたことを述べている[39]。盛加井の東にあるテラフグ御嶽あたりはその１つである。ここには与那覇原という集団の拠点（城）があったと考えている。

宮古の旧記「宮古島記事仕次」によれば、宮古を恐怖に陥れた「与那覇はら軍（イウサ）」と呼ばれる戦があった。その頃は「兵を好んで戦戈止む時なし。もし戦い負る時はその村を焼き払い男女１人も不残屠殺し、その田畑を奪い取る世俗」であったという。「平良より東」にある与那覇はらという間切には兵が十行（つら）もいる。一行とは百人のことだという。「この十津らの兵共驍勇にして至極無道なり。常に諸村を攻落すを業として厭うことなし[40]」といわれるほどの戦闘集団であったという。

この至極無道な集団に勝利したのは目黒盛豊見親という人である。後述するように、稲村氏はこの目黒盛豊見親は倭寇の子孫だとしている。この与那覇原と目黒盛が戦った年代を『史伝』は 1365 年頃、『庶民史』は 1370 年代、砂川明芳氏は 1400 年代の初頭だと考察している。この時期は概ね「按司・殿の時代」と重なっている。伊波氏のいう「倭寇が占領していた時代」なのであろうか。また、「征西府くずれの勢力」が南下してきた時期は砂川氏説と微妙に重なる。

盛加井の東にテラフグ御嶽という拝所がある。稲村氏はこのあたりは与那覇原の根拠地であっ

たと強調されている。稲村氏は、御嶽の近くを約１坪、深さ 30 センチばかり発掘、青磁片 34 個、白磁片９個、南蛮陶器 18 個、南蛮甕片 45 個、鉄塊２個を拾得している。この出土量は倭寇遺跡の上比屋城以上であり、ここは与那覇原軍の城のあった場所で、「是等の遺物の存在はまた与那覇原が和（倭）寇に関係深いことを示している[41]」と述べている。与那覇原軍を倭寇といわないまでも、倭寇と関係が深い集団としている。すなわち、「与那覇はら軍（イウサ）」は、倭寇が宮古に渡来した後の出来事として捉えられる。

1370 年代後半は倭寇の猖獗が最も激しかった時期で、倭寇は朝鮮半島を侵寇の対象としているので、南島を拠点とする利便性はあったのだろうか。倭寇が宮古に渡来したとすれば征西府の滅亡後と見るべきではないだろうか。そうなれば「与那覇はら軍」と倭寇の関連も征西府の滅亡後のこととして見ることもできよう。

田中氏は「14～15 世紀の倭寇は、史料によって見るかぎりでは商人としての行動はほとんど見えず、米や人民の掠奪者や殺戮者の面が強くあらわれている[42]」と指摘している。また、『高麗史』の話として、辛禑（しんぐう）王（1375～88）の初年に、日本人の藤経光という人が入寇と称して恐喝して食糧を求めた。朝鮮は食糧を与えたが、誘殺しようとして失敗した。「この事件以前には、日本人は沿海の州郡を侵略しても人を殺すことはなかったが、経光の事件に激怒してからは、入寇するたびに婦女や幼児を皆殺しするようになった[43]」とも述べている。

「殺戮者」あるいは「皆殺しにする」という倭寇の一面は、前述した「宮古島記事仕次」の「男女１人も不残屠殺」にも重なるように見える。

３、双紙の伝来

ここでは「倭寇と密接な関係がある」双紙の伝来の時期について、稲村氏はどのように考えているのかを見ることにする。

稲村氏は、砂川および友利地域に伝承されている双紙を便宜的に「砂川双紙」と呼称している。双紙は『倭寇史跡の研究』の中核をなすものであり、安倍晴明の「金烏玉兎集」そのものであると結論ずけている。「金烏玉兎集は日本陰陽道の秘書として安倍晴明の子孫である土御門家に秘蔵されてきたものである」として、征西将軍懐良親王が九州鎮撫に際して、「土御門家の陰陽師を随伴されたであろう」と推察し、征西府の没落で「金烏玉兎集がその陰陽師と共に南島に伝来したと考えることが自然であろう[44]」と強調されている。

上比屋山の居住者は、征西府の滅亡により倭寇の仲間入りした「征西府くずれ」の人々である、という。彼らは懐良親王を日本国王として仰いでいた人々である。懐良親王は明国から「日本国王良懐」の称号を与えられている。双紙に「東（あがり）なりかね百帳主」の神名があることからもうなずけるものであり、上比屋山の居住者にとっては最も重要な神様である、という。「あがりなりかね」は宮古島語で「あがりなら」と「なりかね」の２つが詰まった発音だという。「あがり」は日本の事で、「あがりなら」は日本を支配する方、日本国王の意味をもつという。「なりかね」は良懐（ながかね）の訓読で、日本国王良懐を宮古島語で訓読すると「あがりならなりかね」となり、詰まって「あがりなりかね」と称した[45]。と説明している。

懐良親王配下の人々が何故に「懐良」を「良懐」と称する必要があったのか。「アガリナリカネ」の神名は検討の余地が残されている。ちなみに「懐良」は「かねよし」、あるいは「かねなが」とも読むようだ。「子（ね）の方母照（んまてらす）がなす」の神名は北方に向かって母国（日本）の神々を祈願したといいながら、一方では日本は東方にあ

るとしている。「東（あがり）なりかね百帳主」の神名を都合よく解釈したようにも思える。

前の屋御嶽に祀られる砂川大殿は、前の屋豊見親[46]とも称しているので前の屋で生まれたことになり、彼は日本渡来者ではない。彼の生まれた寛正年間（1460 年頃）には既に上比屋山には双紙が伝来されていた。砂川大殿は上比屋山の末頃の人で、当地に永住する覚悟を以て前の屋御嶽の遺跡を 20 歳の頃、1480 年頃に建造したという。また、上比屋山城趾の遺跡と前の屋御嶽の遺跡とは年代に於いて５、60 年ばかりの隔たりがある。このような考えから「双紙の上比屋山伝承は〔砂川大殿の生年〕1460 年以前からいくらも隔っていない頃の事である[47]」と考察している。両遺跡の年代差を５、60 年とする根拠は不明だが、砂川大殿の 20 歳頃（1480 年）からすれば双紙の伝来は 1420 年代あるいは 1430 年代として想定される。ところが稲村氏は「双紙の上比屋山伝来は 15 世紀中頃[48]」とも考えている。

稲村氏が砂川大殿の生年を 1460 年頃と想定する基には、大殿の甥にあたり 1500 年八重山に従軍した金志川豊見親の年齢をは 20 歳頃としている。その 20 年前の 1480 年頃、大殿は 20 歳とすると、20 年前の 1460 年頃に大殿は生まれたことになる。一世代を 20 年とする考えに基づいている。

五　上比屋山は倭寇の根拠地か

１、上比屋山遺跡と倭寇

稲村賢敷氏は、1420 年頃に渡来した倭寇（上比屋山居住者）が上比屋城を築造したと考えているので、上比屋山遺跡から出土あるいは採集される中国産の陶磁器がいつ頃のものであるかが重要な意味をもってくる。

稲村氏は発掘という考古学の手法を取り入れて上比屋山遺跡を考察している。遺跡の発掘は宮古では最初のことと思われる。稲村氏は 1954 年５月 18 日、うまにゃーず御嶽（マイキサマムトゥ）の前庭東方を 1.8 メートル×1.8 メートル、深さ 30 センチばかりの範囲で発掘して、以下の遺物を拾得している[49]。

１、竜泉焼の青磁破片　　24 個
（底部の破片２個を含む）
２、南蛮焼の破片　　28 個
３、赤色粗製の土器破片　　135 個
４、その他不明の陶磁器破片　44 個

わずか２メートル四方、深さ 30 センチばかりの発掘で青磁、南蛮焼が 50 個余も拾得されたので、上比屋山には相当数の青磁、南蛮焼があるという判断の基になっているようである。

金関〔丈夫〕博士の鑑定によれば、「上比屋山遺跡から拾得された青磁破片は上質ではないが竜泉窯である[50]」としている。竜泉窯とは浙江省にある地方の窯である。ちなみに稲村氏のいう南蛮焼とは褐釉陶器、赤色粗製の土器はいわゆる宮古式土器のことである。

倭寇が上比屋山を根拠地としたのは、征西府の滅亡（1392 年）後のことで、先述したように 1420 年代あるいは 1430 年代だとしている。そうであれば拾得された青磁は 15 世紀前半頃の製品と考えられる。稲村氏は拾得した青磁片について「元明時代の竜泉焼と見るべきものであろう[51]」としているので、14 世紀代の青磁が 15 世紀になって上比屋山持ち込まれたと捉えている節がある。金関氏は上比屋山遺跡出土の青磁について竜泉窯であると指摘しているが、時期については触れていない。

竜泉窯の青磁で上比屋山遺跡の麓にある砂川元島遺跡からは 14 世紀や 15 世紀前半の青磁も出土している。上比屋山遺跡から採集される青磁の中にも 14 世紀代の青磁も含まれていることから、同遺跡は 14～15 世紀の遺跡として知

られている。中国産の青磁からすれば、倭寇渡来（1420 年代）以前から上比屋山には人々が居住していた可能性は否定できない。土器の出土はそのことを裏付けている。上比屋城は渡来した倭寇によって築造されたという見解には賛同しかねる。

うまにゃーず御嶽の北方に当たり城内で最も高いところ、城跡の本丸に相当する所でもうまにゃーず御嶽と同じ日に発掘を行っている[52]。ここから拾得されたのは、

１、竜泉焼の青磁破片　　５個
２、南蛮焼の破片　　25 個
３、赤色粗製の土器破片　　160 個
４、陶土器の不明品　　53 個

である。竜泉焼（以下竜泉窯とする）の青磁片は５個と少ないが、全体として土器はやはり多い。土器は倭寇が伝えた技術「轆轤を使用して製作されたもの[53]」であるとしているが、上比屋山遺跡の土器は宮古各地域の遺跡から採集される土器とほとんど同じであり、地元の人々が製作したものである。土器は粘土を紐状にして巻き上げ方法で製作されているので、倭寇が伝えたという轆轤の技術で製作されたとはとても考えられない。稲村氏が上比屋山遺跡は倭寇の根拠地であることを力説する１つには、竜泉窯青磁片および南蛮焼片が多量に拾得されることにある。

渡来した「征西府くずれ」の日本人（倭寇）は当初、友利元島の後方高台に居住していたが「島民の耳目に触れないように居住地を隠蔽する必要[54]」に迫られ要害な上比屋山に居住するようになったという。しかし、海外への往来は砂川元島の「ンナグザー（みなこじの浜）」を利用せざるを得ない。また、船も繋留しなければならない。島民の耳目に触れないようにすることが出来たのだろうか。「たいつき岩（じー）」と称する場所から烽火を上げたともいうから、島民から隠れて居住することは不可能だといえよう。

上比屋山に居住した人々は島民との間に血族的関係が多くなっていった。しかし、「特別関係の出来た人々以外は弘治（1488～1505）、正徳年間（16 世紀初頃）には当地を引き上げる者が多かったようである[55]」ともいう。倭寇は島民との接触を避けて上比屋山に隠棲したはずなのに、何故に島民と血族的関係を結ぶことになったのだろうか。このことについての言及は見られない。倭寇が宮古人化したということなのであろうか。島民と血族的関係を結んだ人々とは、倭寇というより征西府配下の武士団のことではないだろうか。

弘治年間（1488～1505）、仲宗根豊見親は中山王府に対する事大恭順の方針を確立し、貢租の制度を確立するとともに、各村々に役人を任命して戸口の調査および貢租の徴収に当らしめた。島内僻趣地に隠棲していた倭寇と称する人々は、次第に不安を感じるようになり島外に去る者も現れてきた。下地字川満附近に居住していた「やまと人」たちが相継いで行衛を晦ましたのは大体 15 世紀の末頃である[56]。と稲村は考えている。

後述することになるが、字川満の倭寇遺跡として喜佐真城跡、みーま御嶽、かがら御嶽の３か所を上げている。この３か所は発掘されていないが、喜佐真城跡、みーま御嶽からも陶磁器は採集される。かがら御嶽からは陶磁器は採集されていないので遺跡としての性格は不明である。倭寇が行衛を晦ました時期を 15 世紀末頃としているのは、恐らく真種子若按司と川満大殿に関する「宮古島旧記」の記事をもとに想定したのではないだろうか。川満大殿は下地方の首長として知られていて、仲宗根豊見親に従い 1500 年の八重山征討に従軍している。それより前のこととして捉えたのではないだろうか。

上比屋山に居住した人々は島民との間に血族的関係をもつようになったという。前の屋御嶽

の「砂川大殿は嘉靖（1522～1566）の初め頃迄上比屋山に居住していたと伝えている[57]」。前述したように、砂川大殿（前の屋豊見親）は倭寇の血筋を引く者で、1460 年頃に前の屋で生まれた、と稲村氏は考えている。この考えに基づけば、砂川大殿の兄弟とされる友利大殿やその子金盛・那喜多津の金志川兄弟も倭寇の血筋を引くことになろう。金志川兄弟は 1500 年に仲宗根豊見親に従って八重山征討軍に参加している。倭寇が渡来したとされる 15 世紀初期の 100 年以上も前からこの地には人々が居住、集落活動をしていた。隠棲していた倭寇は彼ら住民と血族的関係をもつことで溶け込み、集落を治める首長の立場になったということであろうか。

稲村氏は倭寇の上比屋山渡来を以下のように考察している。

上比屋城内にある遺跡は「ここを根拠地として倭寇および密貿易等が盛んに行われていた頃の遺跡」である。前の屋、喜佐真御嶽の遺跡は、「大部分の者が何等かの変動のために当地を引き揚げて後に、少数の者が島内に縁故が出来たために残留して築造したものであろうか」。前の屋御嶽遺跡は「文明年間〔1469～1486〕に砂川大殿によって築造されたものであろうから、城趾内の遺跡はこれより約 60 年程前の応永年間〔1394～1427〕に築造されたものであろう[58]」と。

前述したように稲村氏は、1480 年頃の砂川大殿は 20 歳の青年と見ている。その頃、砂川大殿は前の屋遺跡を築城したと考えている。上比屋城が前の屋御嶽遺跡より 60 年程前に築造されたとする考えは、伝説、発掘品および遺跡の荒廃程度、石工技術の程度から導き出されている。このことから上比屋城は 1420 年代に渡来した倭寇によって築造されたとしている。征西府滅亡（1392 年）後の 1419 年、「三島の倭寇」の 1 つ対馬は朝鮮軍に攻められ大打撃を被った「応永の外寇」を最後に前期倭寇は終息したとされている。倭寇が宮古に渡来したという時期がこの頃に重なっている。

２、童名「がーら」は倭寇の子孫か

稲村氏は『倭寇史跡の研究』で「童名の研究」の章を設定している。

結論を先にすれば、「宮古語の『がーら』という名称には頭という意味がある。当時日本から渡来した人々がその仲間の頭梁に対して『かしら』と称していたので、島民はこれを宮古島語の訛りに依って『かーら』または『がーら』と称した。しかし、その意味は日本語の『かしら』と同じように仲間の頭首という敬称の意味があった。これが次第に日本人全部に対する名称となり、その子孫もこれを誇りとして継承するようになった[59]。」

この見解からすれば、「がーら」を倭寇といっているのではなく、日本人渡来者の「かしら」が訛った島語だといっている。いつしか「がーら」は日本人を総称した言葉になったということである。童名「がーら」を倭寇の子孫としているのは「童名『がーら』当時日本海寇の名称として通っていた日本甲螺（かうら）にその音が相通している[60]」ことからきているようだ。ちなみに、「ゴーラ」あるいは「ガウラ」といえば宮古では苦瓜のことである。

「宮古島旧記」に目黒盛豊見親は父祖伝来の土地を取り戻すため「七人兄弟」と争ったという記事がある。その争いで目黒盛が用いた戦法は、倭寇の戦法として有名な「蝴蝶陣」や「長蛇陣」だという。この戦法は目黒盛豊見親が独自にあみ出したものではなく「父祖によって語り伝えられた駆け引きや戦法等を実際に活用したものであろう[61]」と、稲村氏は解釈している。

目黒盛の父は根間角がーら天太の大氏、祖父は根間の大按司という。根拠はすっきりしないが、稲村氏は与那覇勢頭豊見親の中山朝貢 1390

年から 5、60 年遡った 1330～1340 年頃に父角が一ら天太は生まれたと類推し、「宮古に於ける童名が一らが使用された最も古い年代[62]」としている。稲村氏は 1 世代を 20 年と想定しているので、子の目黒盛は 1350～1360 年頃に生まれたことになる。倭寇が高麗国の沿岸を侵寇し始めた頃である。ちなみに『史伝』は 1340 年頃に生まれたとしている。

目黒盛の父にも祖父にも「根間」という地名が付いていることから、「前の屋豊見親」（砂川大殿）にならえば、父・祖父の 2 人は宮古で生まれたことになろう。倭寇の戦法を伝えたという父祖とは誰を想定しているのだろうか。

世代計算によれば目黒盛の祖父は 1330～1340 年頃には 20 歳と考えられる。その頃、倭寇は朝鮮で「蝴蝶陣」や「長蛇陣」の戦法を用いていたのだろうか。倭寇が朝鮮沿岸に入寇するのは 1350 年以後とされているので、祖父根間の大按司が倭寇として行動していたとは考えられない。また、父角が一ら天太に童名「が一ら」があるからといって倭寇の子孫だとするにはいささか無理があるように思われる。「が一ら」あるいは「か一ら」は「かしら（頭）」の意と理解していいのではないだろうか。

稲村氏は、征西府の滅亡（1392 年）後に倭寇を含めた日本人は、宮古上比屋山に渡来したと考えているのだが、平良地域にはそれ以前に渡来したということなのだろうか。平良地域のテラフグ御嶽、後川遠見（ししかあ）、やまと井附近からも上比屋山遺跡と同じ青磁や南蛮焼が拾得されることから倭寇遺跡として考えている。「この 3 か所の居住者は寧ろ進んで陸上の経営に当たったような所が見られます」。この居住地が平良に近接している関係で「隠棲することは到底不可能な状態にあった」。それで鍛冶を伴っていた彼らは、「武器を製作して防御の策をとった」。一方では「農具も製作したので農民の多くは彼らの城下に集まり部落発達[63]」をしたと述べている。

３、倭寇が伝えた文化的影響

稲村氏は、日本人渡来者たちが宮古に伝えた文化的影響として以下の 5 点を挙げている[64]。日本人渡来者たちとは倭寇を含むものと理解される。

（1）造船技術および航海上の知識が伝わった

砂川大殿は前の屋御嶽に造船技術の開祖として祭られている。前の屋御嶽双紙に「前の屋船」の絵図が描かれ、二十八宿星の記録がある。

（2）土器製作の技術

上比屋山遺跡から拾得される多量の赤色粗質の土器は、轆轤を使用して製作されたもので、砂川元島にその製作窯があったと伝えられる。これは倭寇が伝えた技術である。

（3）鍛冶の伝来

鍛冶を伝えたものは伝説によればすべて日本人であった。上比屋山御嶽の祭神うまにゃーずの子金殿は鍛冶神で、鍬、へら、鎌などの農具を打ち出し農業を広めたことが「金殿があやぐ」という神歌に歌われている。

（4）仏教の伝来

友利村の金志川豊見親は、1513 年大般若経六百巻を琉球国から買い求め、壇を築き唱経祈祷した。金志川豊見親は砂川大殿の甥と伝えられ上比屋山居住者の子孫であるから、彼ら仲間にはそれ以前から仏教が伝わっていた。

（5）建築、石工技術の進歩、および文字の伝来。

の 5 つである。これらを倭寇が伝えた文化としていいものか少し考えてみよう。

①1320 年頃に伝来したとされる「双紙」には上比屋御嶽双紙、喜佐真御嶽双紙、そして前の屋御嶽双紙がある。この 3 つを双紙元と称している。その中で船の絵図が描かれているの

は前の屋御嶽双紙だけである。「前の屋船」の絵図は、前の屋で生まれた砂川大殿があとから書き加えたものだという。秘伝の書とされる「金烏玉兔集」が形をかえて「双紙」として伝えられたとしている。双紙は近世日本の「大雑書」の影響を受けたものであるとする考えもある。

②轆轤を使用した土器製作としているが、上比屋山の土器は粘土を紐状にして積み上げて仕上げている。砂川元島に窯跡があったという伝承を傍証にしているが、この種の土器は野焼きで生産されたものであろう。16 世紀頃になって、回転板あるいは轆轤を利用して制作された土器は登場する。倭寇が伝えた技術というより琉球から導入された技術と見るべきであろう。土器は倭寇が渡来する以前から生産されているものである。

③鍛冶の伝来に関係する御嶽は、稲村氏が指摘しているように、友利の嶺間御嶽、平良の船立御嶽、伊良部の長山御嶽および比屋地御嶽、多良間の運城御嶽の５か所がある。稲村氏は鍛冶の伝来、すなわち鉄製農具の使用について「13 世紀中頃以後[65]」と提起しているので、倭寇が持ち込んだするには整合性にかける。また、神歌「金殿があやぐ」に歌われるカニドゥヌはうまにゃーず（女神）とさーにゃぷず（男神）の一男とされウイウスムトゥに祭られている。

⑥仏教の伝来について、金志川豊見親の以前に倭寇が伝えたとするには穿ち過ぎるような感がする。あまりにも根拠に乏しい。金志川豊見親が 1513 年大般若経 600 巻を琉球国から買い求めていることを史料としているが、それ以前に倭寇が伝えたという根拠にはならない。

⑦建築、石工技術の進歩は具体的に何を指しているのか不明であるが、前の屋御嶽の石壇や門構えなどであろう。文字の伝来とは「双紙」を想定しているのだろうか。

七　その他の倭寇遺跡

稲村賢敷氏は、上比屋山遺跡の他、宮国、川満、保良元島の倭寇史跡（図２）を取り上げている。倭寇の根拠地上比屋山のように「双紙」は残っていないが、上比屋山遺跡から拾得される竜泉焼の青磁片や南蛮片〔褐釉陶器〕を根拠の１つにしている。「たいつき岩」と称される遠見台があることもその１つに上げている。それから日本人渡来者であることを裏付ける童名「がーら」の存在も上げている。稲村氏が倭寇の居住地としている遺跡を１つずつ紐解いてみることにする。なお、尺貫法の記述はメートル法に置き換えた。

１、字宮国付近の倭寇遺跡

（１）たいや一原遺跡

たいや一原は現在畑地であるが、畑の周囲には立派な石垣を繞らした所が２、３か所あり、かつての居邸跡であったことを思わしめる。東方には甘井（あまがー）という清水がある。南の岡の上には「たいつき岩（じー）」と称する遠見台の遺跡があり、方位石を取り付けてある。たいや一原から南に 1.5、6 キロばかり行くと「ふかい端（ばー）」と称する入江がある。ここには「んなふか」の神が上陸されたと言い伝えている。

竜泉焼青磁片 22 個（内 15 個は屋敷内）、白磁の盃片１個、乳色の磁器片７個、乳色青釉の磁器片４個、南蛮焼片 131 個（内 13 個は屋敷内）、赤色粗質土器片 37 個が拾得された（1954 年）。たいや一原遺跡には屋敷跡、遠見台、船着き場、また拾得される陶磁器は上比屋山遺跡のものと全く同一のものであるから「倭寇の遺跡であるとする事が妥当であると考える[66]」と述べている。

（２）てまか城趾

宮国部落から平良に向けて５、600 メートルばかり行くと右手にある丘陵の上にてまか城趾はある。規模は東西約 109 メートル、南北約 91 メートルの城跡で周囲は 1.8 メートルから 2.7 メートルほどの高さの石垣が繞らされている。南に向けて石垣の崩れた所があり門跡と見られる。城内北方に井戸の跡、中央部に小祠がある。小祠の辺りから高麗焼類似の乳白色の釉薬のあるひび焼きになった陶器片１個、南蛮焼き片１個を拾得した。

城趾は決して要害の地ではない。「ただ昔時この付近は原始密林に覆われ、また島内各地から隔離された地方であるから島民の耳目に触れないように隠棲する場所としては適当な所であろう」[67]。一般には「てまか牧」として知られている。周囲の石垣の跡や井戸の設備から見て牧場として使用するために造られたとは思えないから城趾を一時牧場に使用したと見るのが穏当であろう。

城趾から南にある小径を下ると「あだん嶺」と称する「んなふか」行事の名所がある。更に南に進むと深江端（ふかいばー）の入江に達する。この遺跡の拾得物は少ないので「今の所何とも言えないが、付近にはたいや原を始め倭寇関係の遺跡が多いからこれらと関係のある所であろう[68]」と述べている。

（３）がーら殿（とぬぅ）御嶽

てまか城趾から西方に６、700 メートルばかり行くと丘陵地の中腹部にがーら原部落がある。この部落の西隅に「がーら殿御嶽」がある。部落民の大部分はこの御嶽に祭られている「がーら殿」血統を引いている。がーら殿が日本渡来者であったという事が考えられる[69]、と述べている。現在は童名「がーら」を称する者はいない。

（４）しかぷや御嶽

しかぷや御嶽は宮国部落の東方海岸縁にある。ここでは「んなふか」行事が行われる。

宮国部落の伝説によれば、「んなふか」神はこの期間〔旧暦７、８月の乙卯日前 10 日間〕に遙か海外の国から船で御出になり深江端（ふかいばー）に御上陸になる。時刻は日暮れから夜になろうとする頃。轡（くつわ）をはめた立派な馬数頭に多くの富を積んだ「んなふか」神の行列が深江端から「あだん嶺」まで御出になってここで一休みされる。ここから島内各地に穀物の種子をお配りになるという。そして「んなふか」満散の日には宮国東方にあるしかぷやの崎から再び海外に遠く去られるという。

海外から帰って来られる「んなふか」神の代わりに倭寇の人々が帰ってきたと仮定するならば、「乙卯日は彼等〔倭寇〕が予め約束した帰島の期日であり、乙卯日前 10 日間という『んなふか期間』は倭寇が帰島を約束期間である事、そしてこの期間は東支那海上に於いて西南風の続く季節の末期に当たり、彼等がこの季節を利用して帰国したであろうという事が考えられる[70]」と述べている。

この４か所の遺跡が倭寇の居住地であったと判断している要素は、①上比屋山遺跡と同じ竜泉窯の青磁片が拾得されること、②「たいつき岩」と称する遠見台があること、③周囲に倭寇関係の遺跡が多いこと、④「がーら殿」の名称があること、⑤「んなふか」神を倭寇の人々と仮定したこと、などである。①拾得した青磁を竜泉窯としてその遺跡を倭寇遺跡とするのは疑問である。これだと明代の青磁が出土する砂川元島、友利元島、新里元島の遺跡も倭寇遺跡となる。②のたいつき岩は歴史的に疑問がのこる。果たしてその頃の遺跡と考えていいのだろうか。④童名「がーら」が日本人渡来者としても倭寇

とはいえない。④仮定の問題には少なくとも願望が入り混ざっているように思える。いずれにしても倭寇の遺跡としてとらえていいのかどうか、疑問はぬぐえない。

２、字川満付近の倭寇遺跡

（１）喜佐真城趾

喜佐真城趾は川満部落の東方の小丘にある。北は絶壁で南に向かって急勾配の斜面をなしている。丘陵の最高所に高さ 1.5 メートルばかりの石垣があり、その前方に石垣や高い石壇の跡がある。人工をを加えた立派な截石を積んで築造されている。城門の跡もなく城趾の遺構とは考える事は出来ない。きさま城趾付近からは青磁または南蛮焼および赤色粗質土器の破片数 10 個を拾得した。

城主の名称の「きさま按司」またはその女「きさまもりまら」等総て日本古語による名称であるから、「彼等が日本渡来者であるということが言えよう[71]」と述べている。

（２）みーま御嶽

川満部落の北部にあり、この付近はかつて「すみや森」と称していた。きさま城趾から西北方に６、700 メートルばかり離れている。この御嶽には天女の天降り伝説が伝えられる。宮古島の伝説で天女と称するのは日本から渡来した女の事を指すのが普通である。この目利真の天女は「天仁屋（てんにゃ）うぷつかさ」と称している。つかさは神に仕える女の事であるから、日本から渡来した巫女であったと思われる。うぷつかさはめりま按司に嫁し、３名の子を授かった。３女めりままかなしの子を「めりま角がーら」という。「すみや森に天降った天女の一族はその名称から考えても日本渡来者であると思われる[72]」と述べている。

（３）加賀良（かがら）御嶽

この御嶽はかがら按司を祭った所であるが、地元では「かにく按司」を祭っているという。浦島大立城の城主は浦島大立大殿といい、息子

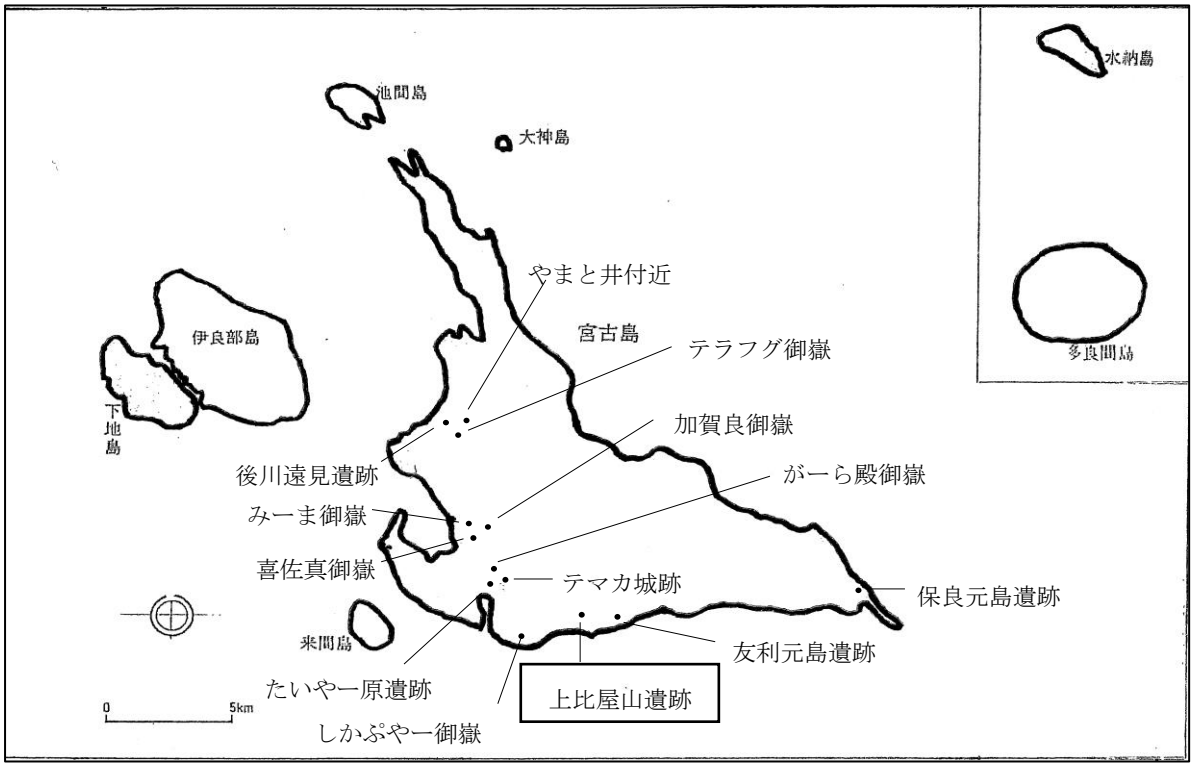

図２　稲村賢敷氏想定の倭寇遺跡

を兼久（かにく）按司という。大立大殿の兄を加賀良按司という。弟大立大殿は兄加賀良按司に殺害されるが、甥の兼久按司に仇討ちされる。「かがら」は「がーら」の訛変で、日本人の事を称した名称である。「弟を殺害したこと等から考えると、倭寇くずれの日本人であったように思われる[73]」と述べている。

以上の３つを倭寇遺跡とする要因は、①「きさま」は日本古語であるから日本渡来者である。②「めりま一族」は日本渡来者である。①と②は日本人渡来者かもしれないが、倭寇であるとは限らない。③「がーら」の名称あるいは兄弟の争いを「倭寇くずれの日本人」とするには疑問が残る。いずれにしても倭寇遺跡とするには説得力にかけるといえよう。

３、保良元島の倭寇遺跡

保良元島遺跡には屋敷跡、墓地の遺跡、「たいつき岩」の遺跡がある。石斧２個、石槍２個、竜泉焼の青磁片多量、南蛮焼片多量、赤色粗質土器片多量を表面採集した。青磁片や南蛮焼片は上比屋山遺跡の出土品と同じである。「まもや」の伝説が伝えられ、「まもやのあやご」がある。まもやは海外から渡来した保良本島居住者の１人である。宮国や川満付近の遺跡と同じく「双紙」は残っていないが、遺跡としては同一のものである。「この元島遺跡が倭寇遺跡あるとする事に於いては、何等差し支えないと考える[74]」と述べている。

竜泉窯の青磁および南蛮焼が多量に拾得されること、伝説の「まむや」は海外渡来者、などから倭寇遺跡としているが、陶磁器の存在は倭寇遺跡とは限らない。この保良元島遺跡は前期倭寇の時代（14 世紀後半から 15 世紀初頭）より以前から形成されていたことは発掘の成果である。倭寇が保良元島遺跡に同居して明代の陶磁器を持ち込んだということであろうか。

遺跡から出土する明代の陶磁器は、宮古の人々が交易で得たケースおよび中国の人々（華南）が交易のため持ち込んだケースも視野に入れるべきではないだろうか。1390 年には琉球に渡航できる船を宮古はすでに所有していたことからすれば、その可能性は否定しきれないと思う。

おわりに

稲村賢敷氏の『倭寇史跡の研究』の検討を試みたが、その中核である「双紙」についてはその伝来の時期に止めた。ただ、「神の座」の神名「東なりかね百帳主」について若干の疑問点だけを述べておいた。

倭寇遺跡から採集される青磁を上比屋山遺跡と同じ竜泉窯としているが、それには検討の余地がある。上比屋山のように隠棲できる場所（遺跡）も倭寇居住地の要素としている節がある。さらに川満に渡来した日本人を倭寇と結びつけている。「宮古島旧記」に日本や中国から渡来した人々の記事がある。当時は島外から多くの人々が出入りしていた時代と考えるべきであろう。中には倭寇と称する人もいたのかも知れない。遺跡から採集される陶磁器は上比屋山遺跡と同じものであるとして倭寇遺跡とするのはどうであろうか。

稲村氏の倭寇に関する考察を改めてみてみよう。

①倭寇の根拠地上比屋山遺跡について、征西府の滅亡でその配下の武士団は、海寇の仲間となり、南下して上比屋山居住者となった。
②その時期は征西府滅亡後の 1420 年代で、双紙もその頃伝来した。

③上比屋山遺跡から拾得される多量の青磁・南蛮焼は密貿易によって倭寇がもたらしたものである。

④上比屋山城は日本人渡来者（倭寇）が築造したもので、倭寇が大陸に渡る中継地、また政変を避けるための隠棲地として、そして根拠地として生活した所である。

⑤また「東（あがり）なりかに」という神名は日本国王良懐に対する彼らの称した神名であり、これは上比屋山遺跡と征西府を結ぶ史料である。

⑥島内の治世が安定するようになると、身の危険を感じた倭寇と称する人々は 15 世紀末頃あるいは 16 世紀初頭頃、島外を去る者も現れた。一方では、島民と血族的関係をもった倭寇は定住するようになった。

倭寇が渡来する以前から宮古島には中国産の陶磁器などが持ち込まれている。11～14 世紀の白磁や青磁、徳之島産のカムイ焼き、および日本長崎産の滑石製石鍋などである。これらの遺物は、宮古がこれらの地域と通交があったことを示している。通交は元明代になっても継続されている。これらの陶磁器が採集される遺跡からは地元産の土器が多量に採集される。土器を生産・使用していた宮古に陶磁器という新しい文化が持ち込まれたということになろう。また、陶磁器を持ち込んだ人々が宮古に居住したことも大いに想定できる。

中国産の陶磁器は、当初はその生産地に係わる人々によって宮古に持ち込まれたものと思慮される。14 世紀に入ると遺跡の数も以前に比べれば倍増している。それだけ島外から人々が宮古に渡来したと考えられる。14～15 世紀、特に明代の陶磁器は量的な差はあれ宮古の各遺跡から採集される。

「宮古島旧記」には唐人あるいは倭人の渡来伝説が記されている。これらの伝説の背景には陶磁器などが宮古に持ち込まれたことを気づかせる。14 世紀には中国の華南あたりから白磁などが宮古に直接入ってきたという研究成果もある。

14 世紀初頭には 60 名余の人々が乗り込み海外に通交出来る船を所有していた「密牙古人」がいたという。また、14 世紀末には琉球を往来できる船を所有していたことも知られている。稲村氏によれば「前の屋船」の伝承もあるという。いわゆる宮古の人々が海外と通交できる要素はあったと見るべきであろう。多くの遺跡から出土する陶磁器を考えれば、各遺跡（集落）は合同で海外に出向き得られた陶磁器を分配したとも考えられる。宮古から通交のため中国（華南）にも航海していたことは充分に考えられることである。

上比屋山遺跡は 14～15 世紀の遺跡なので、この遺跡から出土する陶磁器を倭寇が密貿易でもたらしたことに限定するのは一考を要する。出土する陶磁器については、上比屋山の裾野に広がる砂川元島あるいは友利元島から出土する陶磁器も併せて考えることが必要なのではないだろうか。

（附記）稲村賢敷氏は明治 27（1894）年東仲宗根村で生まれた。2019 年は生誕 125 年目の節目にあたった。10 月 6 日（日）には、令和元年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第 3 回シンポジウム「海域アジアの倭寇について考える―稲村氏賢敷生誕 125 年記念―」が、宮古島市立中央公民館で催された。また、10 月 26 日（土）には沖縄県立芸術大学でも催された。

［注］

（1）稲村賢敷『琉球諸島における倭寇史跡の研究』（吉川弘文館、1957 年）２頁。

（2）柳田國男「倭寇の遺跡など」（『故郷七十年』

神戸新聞総合出版センター、1989 年所収）
401-402 頁。

（３）伊波普猷「琉球に於ける倭寇の史料」（『古琉球』所収、琉球新報社、1965 年、初版は 1942 年）108 頁。
根拠は不明だが、『宮古史伝』（慶世村恒任、1927 年）は、按司・殿の代はほとんど同時代であると見なして、1320～1380 年の約 60 年間と考えている。
（復刻版、1976 年、33 頁）

（４）慶世村恒任『宮古史伝』（城野印刷所、1976 年、初版は 1927 年）33 頁。

（５）「琉球新報」1963 年７月１日付１頁特集。
「琉球本島先島で、多数発掘または採集出来る青磁類は、倭寇の掠奪物とは考えられず、沖縄諸島が南蛮や支那と自由貿易を行った結果の遺物に外ならない」と、岡田輝雄記者に語る。
新聞記事は下地馨著『宮古の民俗文化』（琉球出版会、1975 年）に転載、収録されている。（53～58 頁）

（６）「琉球新報」1963 年７月９日（１）～７月 15 日（５）。

（７）「琉球新報」1963 年８月 29 日（１）～９月９日（11）。
投稿記事は下地馨著『宮古の民俗文化』（琉球出版会、1975 年）に転載、収録されている。（59～105 頁）

（８）「琉球新報」1963 年９月 18 日（１）～９月 23 日（６）。

（９）注（１）前掲書、47 頁。

（10）注（１）前掲書、149 頁。

（11）田中健夫『東アジア通交圏と国際認識』（吉川弘文館、1997 年）13 頁。

（12）注(11)前掲書、５頁。

（13）田中健夫『倭寇』（講談社、2012 年）113 頁。
「海禁令」は、1371（洪武４）年、1394（洪武 27）年、1397（洪武 30）年、1433（宣徳８）年、1449（正統 14）年、1452（景泰３）年等にもかさねて出されている。
1567（隆慶 10）年、福建巡撫塗沢民の上奏で、明初以来 200 年にわたって施行されてきた海禁令は解除された（168 頁）。

（14）藤田豊八「琉求人南洋通商の最古の記録」（『史学雑誌』第 28 編第８号、1917 年）
803-881 頁

（15）伝説は「御嶽由来記」（1705 年）、「雍正旧記」（1727 年）、「宮古島記事仕次」（1748 年）などに収録されている。なおこの３件の「宮古島旧記」は『平良市史』第３巻資料編１前近代（1981 年）に収録されている。

（16）『中山世鑑』「洪武二十三年庚午、南夷、宮古島・八重山島、重訳、始来貢ス」（『琉球史料叢書』第５、東京美術、1972 年）。
『球陽』「察度王四十一年、宮古・八重山、始めて来朝し入貢す」（沖縄文化史料集成５『球陽』読み下し編、角川書店、1974 年）106 頁。

（17）武田幸男編訳『高麗史日本伝』（上）（岩波文庫、2005 年）200 頁。
『高麗史節要』にも「倭寇の興るはこれより始まる」とある。この年の干支が庚寅だったのでので「庚寅以来の倭賊」という呼び方が行われるようになった。

（18）注(17)前掲書、56 頁。

（19）注(11)前掲書、４頁。

（20）注(1)前掲書、３頁・22 頁・37 頁。

（21）注(13)前掲書、23 頁。

（22）注(1)前掲書、３頁。注(13)前掲書によれば、朝鮮への倭寇の行動回数は 1350～76 年までは年に１回から７回で、多い年でも 10、12 回である。ところが 1377～83 年は 17 回から 29 回に及んでいる。1384～92 年には１回から 12 回と減少している。
212～213 頁。

(23) 注(11)前掲書、8 頁。
(24) 注(11)前掲書、17 頁。
(25) 注(13)前掲書、89 頁。
(26) 注(11)前掲書、13 頁。
(27) 注(11)前掲書、18 頁。1377 年捕虜数百人、1378 年捕虜 230 人余を送還。
(28) 『朝鮮王朝実録琉球史料集成一訳注篇一』（榕樹書林、2005 年）31 頁。32 頁。33 頁。東恩納寛惇『黎明期の海外交渉史』(琉球新報社、再版 1969 年、初版 1941 年）37～43 頁。「元中６［1389］年（明の洪武 22 年）即ち高麗の辛昌元年に察度が其の子玉之を遣はし、倭寇の為めに掠められた其の国人を還し硫黄、蘇木、胡椒及甲を献じて順天府に到った。琉球の来聘は前代曾てなき事である」(『黎明期の海外交渉史』37 頁）
(29) 注(28)前掲書、「婦女３名、呉加・三特・就帯する小女〔幼女、少女〕位加」、38 頁。
(30) 注(28)前掲書、44・46 頁。注(11)前掲書 19 頁。
(31) 注(28)前掲書、58 頁。
(32) 注(28)前掲書、58 頁。注(11)前掲書、19 頁。
(33) 注(11)前掲書、21 頁。
(34) 砂川明芳『宮古島郷土史考』第５部（宮古印刷、1989 年）31～32 頁。
(35) 稲村賢敷『新版宮古島庶民史』（三一書房、1972 年、初版 1957 年）203 頁
(36) 注(1)前掲書、12 頁。
(37) 注(1)前掲書、18 頁。
(38) 注(1)前掲書、35 頁。
(39) 慶世村恒任『宮古島旧記並史歌集解』（至言社、1977 年）472～492 頁。
(40)「宮古島記事仕次」(『平良市史』第３巻資料編１、1981 年、所収)76 頁。
(41) 注(39)前掲書、474 頁。
(42) 注(11)前掲書、6 頁。
(43) 注(13)前掲書、37 頁。
(44) 注(1)前掲書、201～202 頁。
(45) 注(1)前掲書、158～159 頁。
(46) 注(1) 前掲書、61 頁。「旅ぱいのあやぐ」
三　旅ぱいや　誰が根立てたり　旅ぱいが
四　船ぱいや　誰がむだてたり　船ぱいが
五　金志川（きんすかー）の　ぶざさ主がど　根立てたり
六　前の屋の　豊見親（とよみや）しゆぅぬど　すたてたり
(47) 注(1)前掲書、197 頁。
(48) 注(1)前掲書、153 頁。
(49) 注(1)前掲書、90 頁。
(50) 注(1)前掲書、96 頁。
(51) 注(1)前掲書、96 頁。
(52) 注(1)前掲書、91 頁。
(53) 注(1)前掲書、204 頁。
(54) 注(1)前掲書、54 頁。
(55) 注(1)前掲書、46 頁。
(56) 注(1)前掲書、45 頁。
(57) 注(1)前掲書、46 頁。
(58) 注(1)前掲書、99～100 頁。
(59) 注(1)前掲書、282 頁。
(60) 注(1)前掲書、265 頁。
(61) 注(35)前掲書、161 頁。
(62) 注(1)前掲書、262 頁。
(63) 注(39)前掲書、486 頁。
(64) 注(１)前掲書、204 頁。
(65) 注(35)前掲書、150 頁。
(66) 注(1)前掲書、208 頁。
(67　注(1)前掲書、209 頁。
(68) 注(1)前掲書、210 頁。
(69) 注(1)前掲書、211 頁。
(70) 注(1)前掲書、218 頁。
(71) 注(1)前掲書、227 頁。
(72) 注(1)前掲書、230 頁。
(73) 注(1)前掲書、235 頁。
(74) 注(1)前掲書、243 頁。